勝つ

マイクロニクス ①

● 高周波の可能性を追い求めて

通信機器開発に独創性

ハンディ型で世界制覇狙う

38歳で独立

電子計測・情報通信機器開発を手掛けるマイクロニクス。社長の田仲克彦は、大手通信機器メーカーの開発部門を経て85年、38歳の時に独立・創業した。06年9月期の売上高見込みは4億7000万円。2010年までに20億円まで引き上げる計画だ。

社名のマイクロニクスは、マイクロウエーブ（3ギガ～30ギガヘルツの高周波）とエレクトロニクスの言葉を重ねた。社是は「C&U（クリエーティブ&ユニーク）」。高周波を利用した独創的な通信機器を世に送り出している。

部門は「電子計測機器」「情報通信機器」「環境関連機器」の三つ。電子通信では「超小型広帯域RFスペクトラムアナライザー」、情報通信は「料金自動収受システム試験システム」、環境関連は「電磁妨害試験システム」と呼ばれ「C&U」に忠実な看板製品がある。

価格は5分の1

なかでも02年に1号機を発売した「ハンディ型スペクトラムアナライザー」は売上高の30%を占め、世界に輸出する。スペクトラムアナライザーは携帯電話、無線LANなどが発信する信号の周波数領域を分析する装置。小型で高性能ながら、価格は大手製品の5分の1以下。ラインアップを充実し「ハンディ型では世界トップシェアを狙える」と田仲は言い切る。

情報通信では高度道路交通システム（ITS）に注力し、料金自動収受システム（ETC）試験機で96%の販売シェアを確保している。ETCは狭域無線通信（DSRC）技術のアプリケーションの一つ。ETC以外の用途開発が進むDSRC関連試験機の開発を進めている。6月に発売した新しい試験機は、次世代型DSRCに対応する画期的な製品として大手電機メーカーから注文が相次ぐ。

環境関連の目玉は、通信機器向け電磁妨害試験システム。スペクトラムアナライザー、インピーダンス安定化回路網、専用ソフトなどをパッケージ化した世界初の製品。施設に行かなくても短時間で電磁波試験ができる。波長の短い情報通信機器の対応をメーンに設計した電波照射とセットで利用を進める。利用企業の開発コストを削減し競争力強化を後押しする。

部門交流で活性化

欧州、米国、アジアなど世界19カ国に販売展開する。創業から20余年。「これからは社員に会社を作っていってほしい」というのが今の田仲の願い。部門間交流を促し社内を活気づけるため7月、三つのプロジェクトを立ち上げた。営業、開発、生産の各部門から1人ずつ計9人を選出。電波暗箱など主力製品の競争力向上について半年間限定で議論を重ねる。

田仲は「アイデアマン」という言葉に抵抗感を持つ。「思いつきで小細工をする人のようなイメージ」。出張の新幹線の中でひらめくことは幾度もあったが、それは原理をしっかりと理解し、何日間も机で考え抜いた後のこと。「C&U」にかなった新しいアイデアが社員の間で生まれることを待ち望みながら、田仲は今日も机に向かう。

（敬称略）

▽所在地＝東京都八王子市小比企町2987の2、042・637・3667▽社長＝田仲克彦氏▽従業員数＝27人▽資本金＝3000万円▽売上高＝4億7000万円（06年9月期見込み）▽URL＝www.microniks.com/

世界に出荷する「スペクトラムアナライザー・MSA358」